

からこかぎ

第28号 令和2年4月13日(月)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 青垣生涯学習センター唐古・鍵考古学ミュージアム内
TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

会長挨拶

今西和代

日頃、唐古・鍵遺跡の保存と活用に関わる活動にご理解とご協力をいただきありがとうございます。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い日常生活に支障が出ている毎日でございます。心からお見舞い申し上げます。

本会は、3月の運営委員会において、感染拡大の状況をふまえ、「令和2年度定期総会」の不開催を決定いたしております。定期総会の活動報告や事業計画などの議案書は、会員のみなさまにご送付させていただいております。特に、昨今の状況を踏まえ、会費は無料とし、前年度会員の方は引き続き(自動)継続とさせていただきます。なにとぞ、ご理解いただき、ご承認のほどよろしくお願い申し上げます。



令和2年度にあたり、運営委員を代表してご挨拶させていただきます。今年度も、活動計画にのっとり、唐古・鍵遺跡の保存と活用に関わる支援事業の一層の充実を図る所存でございます。とりわけ、重点事業と位置



づけております「古代ものづくり体験活動」や「小学校総合的学習支援活動」さらには「弥生ウォーク」につきましては、引き続き実施してまいります。しかし、昨今は、新型コロナウイルスの感染が拡大しています。会員の皆様の健康と安全を第一に考え、会の活動自粛を含め運営してまいります。本会のホームページ・メール・会報などご参照をお願いいたします。また、前年度末に

予定していました奈良県外の弥生遺跡訪問のバス旅行も順延いたしました。何とか新型コロナウイルスが収束し、バス旅行が一日も早く実施できることを願っています。

最後に、昨年度の活動報告書に記載してございますが、会員数が前年度に続き減少傾向でございます。私どもの会は17年前に発足し、数年前は80名を超えるほど会としては充実してまいりました。しかし、平成から令和と元号が変わり、現在の運営委員をはじめ会員の皆様にあっても高齢化が進行しています。引き続き重点目標として「会の活動のあり方の検討」は、長年間築き上げてきました「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」の活動を継続・発展するためにも必要不可欠な検討と考えています。引き続き、会員の皆さまのご意見をいただければありがたいと思っています。



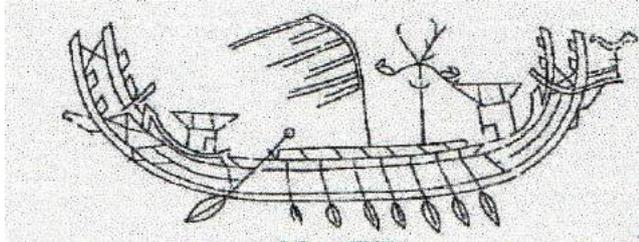
今年度は、先ほど述べましたとおり、新型コロナウイルスの感染拡大のため、本会活動の先行きも不透明な部分がございます。会員の皆様もくれぐれもご自愛くださいますようお願いいたします。

(上写真:1月 下之郷遺跡子供交流会。中写真:2月 作品展示会。下写真:3月 奈良テレビ観光大使撮影風景。)

「からこかぎ」訂正文

令和元年11月5日発行の「からこかぎ」第27号2ページ下段の写真に誤りがありました。次の通り、訂正いたします。

訂正前



訂正後

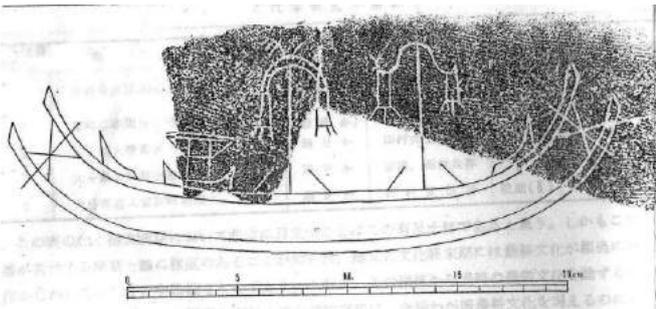


遺物紹介 まぼろしの一品～舟画

会報編集グループ

1 はじめに

前号（「からこかぎ」27号）で「遺物紹介～シャーマン像」を掲載しましたが、そこでの紹介写真に誤りがありました。前項の「からこかぎ訂正文」を参照願います。昭和18年に刊行された「大和唐古彌生式遺跡の研究」（第1室展示）では「**所蔵者不明の絵画土器**」と紹介されていました。しかし、まぼろしの考古遺物は、昭和33年に当時の奈良学芸大学が現在地に移転した際に、史学研究室旧蔵の考古資料の中から発見されました。発見者の西



谷正九州大学名誉教授は、「赤褐色、薄手の、表面には横走刷毛目のある胴部、タガ状突起のすぐ下部に、横に長く篋（へら）で線画きされている（左：写真 **黒色部分が残存片**）」と報告し、古墳中期前半の円筒埴輪に線刻された準構造船とされています。（「円筒埴輪に描かれた舟画について」1960年「考古学研究」25号17～19頁）。

また、唐古・鍵遺跡から出土する円筒埴輪と趣きを異にするとし「発見者が不明な今日、唐古遺跡から出土したものがどうか確かでない」とされています。なお、当時、提供された拓本を基に復元図（訂正文：右復元図）を作成した小林行雄先生も埴輪片とし「所蔵奈良学芸大学」（「世界考古学体系」日本Ⅲ1959年5頁）と修正されています。

一般に、古代船の復元は、①土器・埴輪の線刻絵画 ②船形埴輪 ③出土した船の部材 ④民族事例や文献などを利用します。特に、少数例ですが出土部材に基づく復元が線刻絵画などの考古資料を裏付けるものとなっています。今回は、出土した船の部材に着目し、訂正文に掲載しました円筒埴輪に描かれた舟絵2点を報告します。

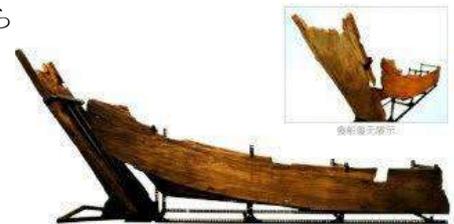
2 巢山古墳の出土部材

奈良県広陵町にある巢山古墳は、古墳前期末（中期初頭との意見もある）の大型前方後円墳で、馬見丘陵古墳群の中核をなし特別史跡に指定されています。2007年の第5次調査で、周濠北東隅の葺石付近から長持型木棺の蓋（クスノキ材 復元長4m幅1m 上面に格子文と直弧文が彫られ赤色顔料が塗布）と船形木製品（**豎板・舷側板・三角形材 復元長8.2m** 次頁：写真 インターネット画像より。以下同じ。）が出土しています。

準構造船は、縄文早期からみられる刳舟（丸木舟）を船底にし、舷側板や豎板などの船材を加え付けた船ですが、出土部材はまさにそれに該当するものです。舷側板（スギ材）の上端（3箇所）の切り込み）や下端（長方形の

小孔が並ぶ)には加工が施され、小孔には桜の皮や木栓が残るなど接合痕跡が確認されています。注目されるのは、舷側板・三角形材の表面に円文様と帯文様が彫刻され、赤色顔料が塗られていた点です。出土した木棺蓋や船形木製品の装飾文様などから、時期は異なりますが「随書」(636年選)倭(倭)国伝の「及葬置屍船上陸地牽之或以小輿」(葬に及んで屍を船上に置き、陸地これを牽くに、あるいは小輿を以てす)」という文言を思い出させます。同書の「貴人三年殯於外」(貴人三年間外でもがり)を済ませた貴人の遺体を実際に運んだ船と重なります。

一方、前述した円筒埴輪の舟絵(まぼろしの一品 前頁:写真)は、確かに準構造船の表現ですが、櫂や鳥の表現がなく、衣笠を2本立て、船首側に屋形をおいています。櫂などの線刻がないことから実際に走航する準構造船の表現でなく、実際の葬送風景を線刻したものとも考えられます。そこでは、2本の幡の傍の屋形は、死者を安置した場所(お輿)で内部に木棺がおかれていたとも想像ができ、ほぼ同時期の巢山古墳の出土部材からみた葬送儀式との関わりが注目されます。

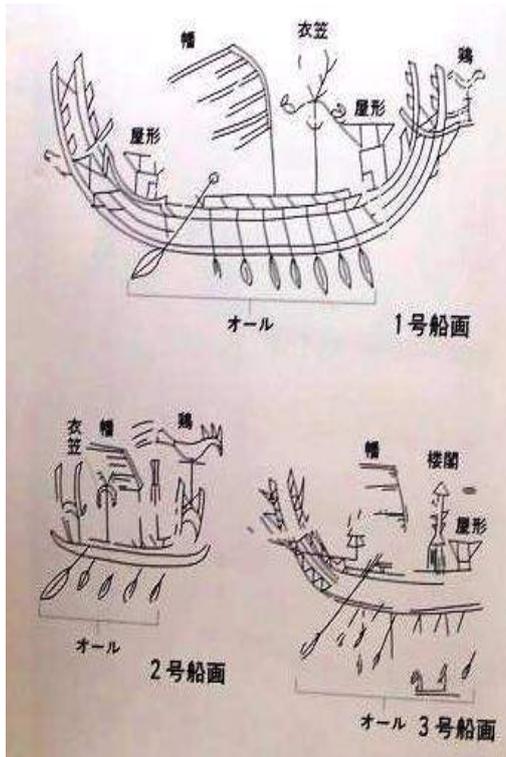


3 久宝寺遺跡の出土部材

巢山古墳の出土部材は、弥生終末期の八尾市久宝寺遺跡の準構造船と類似しており、古墳期に継続する弥生末期の準構造船の構造に注目が集まります。久宝寺遺跡からは、昭和10年には弥生土器や土師器とともに

刳舟の残材が出土していましたが、昭和58年に大阪線の道路整備工事に伴う調査で、弥生終末～古墳期初頭の

小溝から準構造船の部材(右上 写真)が出土しています。部材は、全てスギ材で削りぬいた船底部と舷側板と堅板ですが、特に側板と堅板には溝や柄穴などの加工痕が報告されていて巢山古墳出土の部材と同じです。船底部(4分の1程度)は、長(294cm)・幅(123cm)・厚(36cm)ですので、直径1m超の大木を利用した復元長12m程度の準構造船と考えられます。海洋学の見地からは、無風・快晴条件下で地文航法(海岸に沿って目視で走行)であれば外洋を含め長距離航行は可能と考えられています。なお、軽量のため喫水が浅く不安定だったと思われ、帆の使用は想定されていません。



一方、大和・柳本古墳群の東殿塚古墳の円筒埴輪(別項訂正文左写真:1号船)は、古墳前期(3C末か4C初頭)の前方後方墳の前方部裾の壇のエリアに立てられたものです。鰭付きの円筒埴輪に3隻(上から二段目に1隻(2号船)・三段目に2隻(1・3号船))が線刻(左:写真)されています。元来、埴輪に船が線刻された出土例は少なく、古墳中期を中心に国内で17例が報告され、ほとんどが簡略な表現が特徴です。(「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料」深澤芳樹編2014年3月)。

同資料では、古墳前期は2例と報告され、あと1例は日本海三大古墳の一つ京丹後市神明山古墳出土の「舟を漕ぐ人」が描かれた円筒埴輪の小片で、古墳前期末と編年されています。神明山古墳は瀧湖を望む位置にあり、麓には瀧湖を利用して大陸や国内各地との交流拠点として活

発化する竹野（たかの）遺跡があります。「舟を漕ぐ人」（左下：写真）を、死者が霊界に舟を漕ぎ出した線刻画とする意見もありますが、不鮮明ですが人物の左側に波しぶき（籠描を消して表現）もみられ、海上交易に関わった有力者の姿を写實的に描いたものと考えられます。



さて、東殿塚古墳の舟絵（前頁下：写真）ですが、幡・衣笠・太刀・鳥・複数の櫂・櫓さらには屋根などが描かれています。三角形の屋根を乗せた上下2層の屋形ですが、1号船には出入口を二つ付け、3号船にも一つありますが2号船にはありません。屋形は、前述のまぼろしの一品と明確に構図が異なり、出入口があることから船室か船倉とも考えられます。そこで、注目されるのが、船の構造の違いです。2号船は、舷側板を船首や船

尾で豎板（波除板）で結合する豎板型の準構造船ですが、1・3号船は、舷側板を閉じず開放し貫材を通して固定する貫型の準構造船です。前者は、弥生中期以降から出土する準構造船のほとんどの方式です。一方、後者は、船形埴輪に多く見られ、出土事例は稀少（大阪府瓜破北遺跡の出土部材が相当）ですが、前者に比べ積載量は多くなるといえます。準構造船の構造や積載量に着目すると、2号→3号→1号船と推移したと考えられます。この変化は、文献資料からみえてくる船の変化とも符合します。

魏志倭人伝によると、景初2年(238年)に卑弥呼は魏に使者2名を帯方群に派遣し、「男生口(奴隷)四人 女生口六人 班布二匹二丈」を献じたとしています。また、その後数回の交流を経て正始8年(247年)に、壹與は晋に20人の使者を送らせ「男生口三十人 貢白珠五千孔 青大句珠二枚 異文雜錦二十四匹」と貢物などを大幅に増やしています。それを支えたのは、準構造船の変化と船団の形成と思われる。

近年、船団の形成を裏付ける資料が出土しています。兵庫県出石町の袴狭（はかざ）遺跡で出土した豎板



型の準構造船を描いた板絵（左：模写絵写真）が弥生後期から古墳期初頭の溝から出土しています。そこには、15隻の船団が描かれています。また、鳥取市青谷上地寺遺跡からも弥生中期後半の大中小型の6隻が描かれた板絵（琴絵）が

出土しています。琴絵は、飛沫を描くなど写實的に表現され、実際に行き来する船の群れを描いたものと評価されています。

4 さいごに

円筒埴輪の船絵は、船形埴輪と同視して大規模古墳の葬送の際に被葬者(大王)の「魂」を乗せて運ぶ「モガリ船」とする見方があります。しかし、近年、鉄素材を含め外来物資の流入と玉をはじめ地域の交易品を弥生から古墳期の移行プロセス解明の重要なキーワードとする意見が多くみられます。少なくとも東殿塚古墳をはじめ古墳前期段階の舟絵は、外洋を含め長距離交易に関わった地域の有力者やそれを支えた準構造船を描いた写實的な表現であったとする視点も留保しておきたいと思えます。

遺跡紹介 筋違遺跡～初期の農耕集落

弥生ウォーク世話人グループ

1 はじめに

三重県松阪市嬉野新屋庄町にある筋違（すじかい）遺跡は、三重県と奈良県の県境にある高見山地の三峰山（みうねやま）に水源を持つ雲出川（くもづかわ）右岸に位置します。筋違遺跡（現標高4～5m）は、調査地北端で検出された旧河道が形成した自然堤防上に立地し、その下層では伊勢湾西岸の旧江線上に形成された砂堆（砂丘列）が確認されています。筋違遺跡から南3kmに弥生前期の土坑・溝が検出された中ノ庄遺跡があります。筋違遺跡と同時期（縄文海進以降）の砂堆上に位置する中ノ庄遺跡は、在地の条痕土器とともに前期古段

階の遠賀川式土器が出土し、東海地域では最も早い時期に弥生文化が到達したとされる遺跡です。筋違遺跡は、国道23号線中勢道路建設に伴う第1次調査（H14年）で前期前葉の水田耕作や畠作農耕に関わる遺構・遺物が確認され、全国的に注目を集めました。さらに第2・3次調査（H16・17年）では生産域と集落域・墓域のひろがり確認されています。集落域は、北側の自然堤防上の微高地にあり、生産域は南の後背湿地にむかう緩傾斜面にあります。遺跡内部には複数の水路があり、弥生前期でも早い時期の灌漑施設が検出されています。

調査では、弥生前期の遺構面が2面確認され、下層遺構面（A面）と薄い洪水砂層を境に同じく前期前半の上層遺構面（B面）そして弥生中期から中世の遺構面（C面）の3面が検出されています。因みに、第3次調査では、B面の屋外炉（SF281）の炉壁に前期前葉の遠賀川式土器片が使用され、器片に付着していたススの放射性炭素年代測定値は、2445年yBP（前期前半と同範疇）と報告されています。B面は前期前葉の遺構面ですので、A面はそれ以前の遺構面であることがわかります。なお、A面の最下層からは縄文晩期の突帯文土器（馬見塚式）が出土しています。以下、発掘報告書を参考に、弥生前期を中心に遺跡を紹介します。

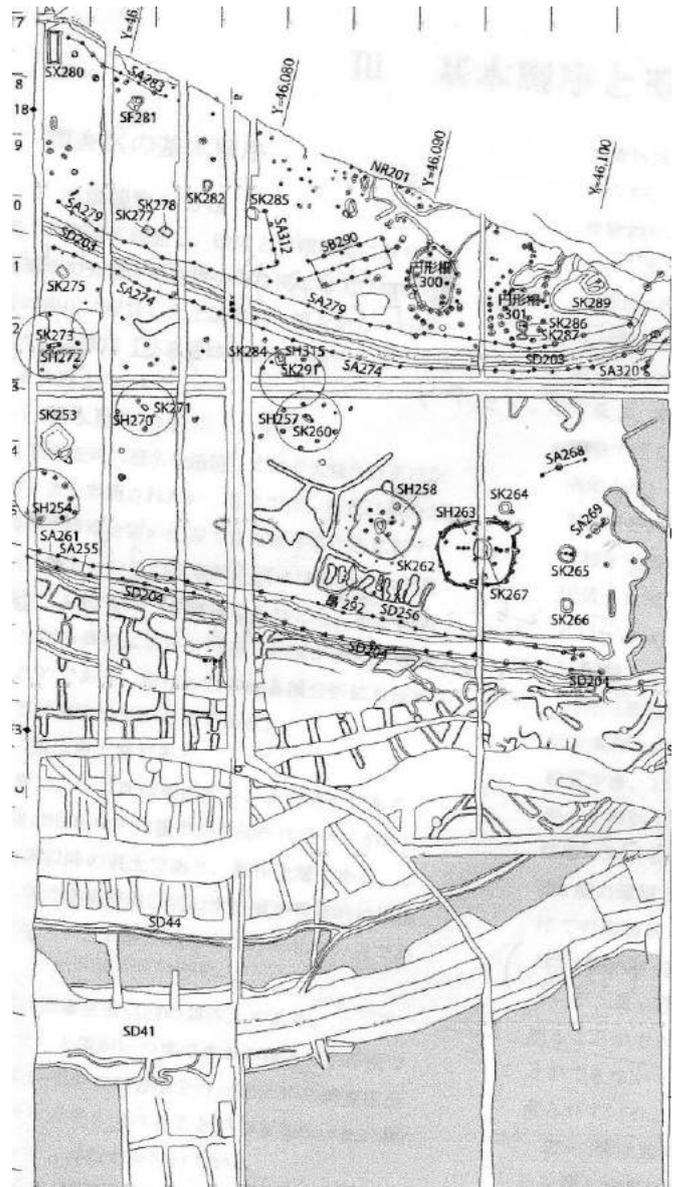
2 居住域～松菊里住居群

居住域は、先述のとおり調査地北端の南東に流下する旧河道（NR201 深さ2.2m以上）が形成した微高地に（北西→南東に緩傾斜）にあります。A面では、遺跡中央部の円弧状の溝（SD204）から南に限られた範囲の調査でしたが、両肩に土堤を伴う溝に沿って柱列が確認されています。また、遺跡南部の大溝（SD41）から旧河道まで拡大調査したB面の調査では、溝（SD204）から北側のエリアからは前期前葉の直径5m前後の松菊里型住居（6）・堅穴住居（1）・総柱型棟持柱建物（1）が検出されています。溝（SD204）は生産域と集落域を区分する機能をもっており、遺跡は前期前葉段階に既に計画的に配置されていたことがわかります。また、C面では後期の堅穴住居（1）と古墳期初頭の堅穴住居（1）が検出されています。

注目されるのは、朝鮮半島の南西部に起源を持ち稲作とともに伝わったとされる松菊里型住居群です。前期初頭の福岡県粕谷町江辻遺跡（11棟）が国内最古とされ、北部九州では福岡県福津市今川遺跡など10をこえる遺跡での検出例があります。しかし、大阪平野や濃尾平野では中期以降の検出となり、奈良県では最古とされる大淀町越部ハサマ遺跡でも中期前葉です。前期ですと、北部九州を除くと兵庫県神戸市大開遺跡・高知県南国市田村遺跡・和歌山県御坊市堅田遺跡と極めて限られています。

松菊里型住居は、弥生文化の伝播のルートを探るヒントとなります。

また、B面からは、総柱型棟持柱建物（SB290 4×2間 7.8㎡）が集落域内から検出されています。中期前葉の唐古・鍵遺跡の総柱型棟持柱建物よりも早い前期段階のものです。国内で前期の検出例は、筋違遺跡以外では



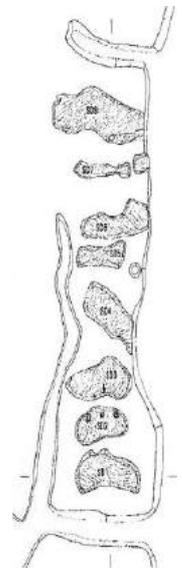
田村遺跡のみです。棟持柱建物、朝鮮半島には検出例は少なく、弥生期では北部九州を含め中期後葉を中心に多くみられます。弥生期の棟持柱建物の起源については、東日本縄文晩期まで継続する掘立柱建物の一形態とし、その系譜で捉える見解が注目されます。唐古・鍵遺跡の棟持柱建物も、発掘当時に同様の指摘がありました。

3 生産域～畠作・稲作の痕跡

筋違遺跡で注目されたのは、弥生初期の農耕ですが、特にその時期と形態に関心が集まりました。A面では、大溝（SD41 旧河道から導水路）の北から畠作の痕跡を示す畝立て状遺構（80～150cm 長の数本単位の畝間 深10cm・畝幅 25～50cm）が検出されました。溝の両肩の土堤からも前期前半の遠賀川式土器が出土しています。また、B面でも、旧河道からの導水路の機能を合わせもつ区画溝（SD204）の北側で畝立て状遺構（下写真）が検出され、さらに集落域西側でも家庭菜園のような一過性の畝立て状遺構が確認されています。

一般に、畠作と認定される根拠として、①畠作耕作痕 ②乾燥した土地条件 ③イネや雑穀類の花粉分析 ④畠雑草の検出 ⑤転地返しなど畠の管理痕跡 ⑥石鍬（土掘具）など道具類の出土 ⑦圧痕土器の出土などが考えられます。筋違遺跡では、乾燥した土地条件での畝立て状遺構とイネのプラントオパール（植物化石）の検出そして精緻な土壌層の分析が決め手となり、弥生前期でも極めて早い段階の畠作が確認されました。

注目されるのは、灌漑水路を利用した栽培形態とイネのみが栽培植物と報告されているところです。最古の水田址が確認された佐賀県菜畑遺跡では、イネとアワが検出され畑地雑草も多く検出されています。これは、朝鮮半島で多く報告されている畠作農耕が稲作とともに伝わっていたことを示しています。筋違遺跡の畠作は、近畿圏では縄文晩期の滋賀県竜ヶ崎A遺跡や京都大学北白川追分町遺跡さらには全国的に注目された弥生前期初頭の香川県文京遺跡や徳島県庄・蔵本遺跡などのイネとアワ・ヒエなどの複合した炭化種子の検出例とは明らかに異なっています。また、朝日遺跡の前期から中期初頭の土器の圧痕分析では、イネの割合が確かに高いのですが、アワ・ヒエなどの雑穀類も報告されています。イネのみの畠作農耕については、遺跡内の有機物の保存状態が悪いことに起因するとの意見もあり、今後の発掘成果を待ちたいですが、縄文晩期から継続するイネの畠作農耕を想起させる発掘成果であることは確かです。因みに、第1調査で出土した縄文晩期後半の突帯文土器の深鉢底部片から、イネ粃圧痕が発見されています。



なお、水田稲作ですが、A面では大溝の南からは水田畦畔（幅 40cm 高さ 1cm）と水口が3箇所検出されています。また、B面（前期遺構面）からも大溝の南北で水田畦畔が検出されています。従って、弥生前期前半では、少なくとも畠と水田を併用した稲作が行われていたことがわかります。

4 初期の環濠集落～環濠内部の墓域

遺跡範囲は、旧河道から前期前半の大溝（SD41）間での南北 75m、東西方向は調査区内では 95m ほどで、さらに西に伸びることが予想されています。第3次調査で、大溝と旧河道をつなぐ南北の溝（SD308）が検出されたことから、遺跡は旧流路（開口部）を利用する前期前半の環濠集落と考えられます。朝鮮半島南東部（嶺南地方）に起源をもつ環濠集落は、初期段階は北部九州を中心に十数件ほど確認されていますが、北九州以外の初期の環濠集落は前期前葉の大開遺跡をはじめ前期中葉の田村遺跡や堅田遺跡など少数です。

墓域は、環濠内部で検出され、住居と墓が近接するという縄文時代の特徴を継承しています。A面では未検出ですが、B面からは、前述の棟持柱建物から屋外炉を挟んで西北 20m から木棺墓（SX280）が検出されています。さらに方形周溝墓は中期後葉を中心に7基ほど検出されています。

以上のとおり、筋違遺跡は、精緻な発掘調査により初期の弥生集落の特徴を新たに示した遺跡といえます。

弥生ウォークの事前案内

弥生ウォーク世話人グループ

令和2年3月に予定していました第31回の弥生ウォークですが、コロナ新型コロナウイルスの感染拡大によりやむなく順延となりました。訪問予定は、雲出川下流域の弥生遺跡でした。雲出川は、三重と奈良の県境にある高見山地に水源を持ち、北東に流れ伊勢湾に注いでいます。訪問予定エリアは、縄文時代から古墳時代に至る濃密な遺跡分布地域です。縄文期は、西方の丘陵地やそれに連なる段丘上に遺跡が散在し、弥生期は雲出川や中村川沿いの東方(低地部)に集落が広がっていきます。とりわけ、弥生終末期から古墳前期にかけて、大規模な灌漑工事を実施した片部遺跡・貝蔵遺跡や堀田遺跡をはじめ下之東方遺跡や天花寺北瀬古(てんげいじきたせご)遺跡など伊勢湾西岸地域を代表する遺跡が多くあり、それら低地遺跡を見下ろす段丘上に墳丘墓や古墳が集中しています。

今回は、集合場所と予定していました近鉄線伊勢中川駅東口にある片部・貝蔵遺跡に限定してご案内します。コロナ新型コロナウイルスの流行が沈静しましたら、改めて第31回の雲出川下流域の弥生ウォークのご案内をいたします。



1 片部・貝蔵遺跡

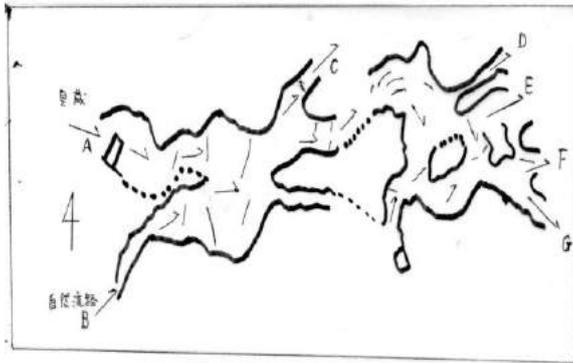
中村川左岸に位置する片部遺跡・貝蔵(かいぞう)遺跡は、伊勢中川駅の区画整理事業に伴う調査(H5~11)で明らかになった遺跡です。標高4mほどの自然堤防から2mの後背湿地に広がる50万㎡を超える集落遺跡と推定され、弥生後期から古墳前期(2~4世紀末)まで継続しています。

(1) 貝蔵遺跡 現在の駅東口広場にあたる貝蔵遺跡からは、幅2mの環濠が東西に2条・南北に1条が確認され、その内部からは竪穴住居は1棟のみですが、小型の独立棟持柱建物(左:写真)や大型掘立柱建物(13×5m)などが検出されています。また、東方に隣接する片部遺跡に連なる大溝(流水路)が検出され、その周辺の柱穴群から埋納されたミニチュア土器が出土しています。注目されたのは、大量の東海系土器とともに北陸系の土器を中心に他地域の土器が多数出土したことです。他地域との活発な交流があったことを示しています。

(2) 片部遺跡 6次におよぶ発掘調査により、大規模灌漑施設が検出されました。北西(A・貝蔵遺跡と連なる幅16m)・南西(B・幅8m)の2方向から流入する大溝(流水路)は、遺跡中央部で合流し大きな貯水池(最大幅30m深さ1.5m)となっています。

その後、5基ほどの堰で水位の調整と水分けし、調査地東端部で3方向に導水するという複雑な構造です。調査地東端のDは付近の灌漑水路でE・F・Gは周辺地域の排水路として広がることが予測されています。大溝(流水路)内には多数の堰址(左:写真)が検出され、最前列の堰は竪杭(径5cm前後)を打設し、大型横木(径20cm前後)で梁を通しその上面に板材(網代で被覆)を敷設する構造となっています。堰は大溝(自然流水路)と平行でないのもあり(30%の角度)、流向・流速を制御する機能を持っていたと考えられています。また、東の分岐前の大溝も、幅16m最大幅28m深さ1.5m前後で貯水機能を持っていたと思われます。なお、溝の築造時期ですが、弥生後期の土器(山中式新段階の高坏)が出土していますので弥生後期後半と考えられ、その後古墳中期初頭には埋没しています。

水路周辺で 100 面を超える水田(前頁右：写真)も検出されています。北東方向で隣接する黒田遺跡の調査



区全域からも弥生後期から古墳期に継続する大規模水田域と水路も確認されています。中川駅周辺から野田・黒田遺跡まで弥生時代後期から大規模水田開発が行われ古墳時代前期末まで継続したことがわかります。

注目したいのは、片部遺跡遺跡の北東に分水される溝C(流路幅 10m 前後)です。流路の方向には、筋違遺跡や西肥留遺跡があり、それぞれの遺跡からは同時期の流路と水田が確認されています。

片部・貝蔵遺跡で検出された大規模灌漑施設に着目し周辺遺跡で検出された同時期の水田祉を考慮しますと、地域では、弥生時代後期から広域的な灌漑用水の供給がなされていたと考えられます。これは、当時の水田経営に着目すると、弥生時代から継続していた「世帯共同体」や「親族共同体」の枠組みを越えて、灌漑施設の建設や水利の調整権能をもつ有力者を中心に「地域共同体」に進化していたと読み取ることもできます。

2 最古の墨書土器

片部・貝蔵遺跡の大規模灌漑施設とともに全国的に注目を集めたのが、平成 7 年に片部遺跡から出土した古墳前期(4 世紀初頭)の「田」の字の墨書土器です。しかし、その 2 年後には貝蔵遺跡から 3 世紀前半の「い」の字の墨書土器と人面土器が出土し、さらに 11 年には同じく貝蔵遺跡から 2 世紀末の「田」の字の墨書土器(左：写真)が出土し、国内最古と考えられています。それまでは、平安時代の墨書土器が最古とされていました。漢字は、殷の時代の甲骨文字に起源があり、秦の始皇帝の時代に一般化したといわれています。国内には、楽浪郡の設置(BC108 年)以降さほど時間を置かず伝来したと思われ、文献史学の立場からは、文字は意味あるものと理解されることによって成立するとして、単なる「記号」とする意見もありますが、当時は既に紀年鏡もみられ、墨書土器の「字形」が一定の意思を表示しその意思を共有したことは確かと思われ、



片部・貝蔵遺跡の北には津市大城(だいしろ)遺跡があり、2 世紀前半の「奉」と刻まれた高坏脚部(刻書土器)が出土しています。周辺には、日本三津(さんしん)の 1 つ「安濃津(あのおのつ)」と呼ばれる古代までつづく港が発見されています。なお、雲出川河口付近の検出された砂堆(砂洲)は極めて薄いので、当時は水深の浅い静穏な水域であったと思われ、天然の良港の存在が予測できます。雲出川下流域での墨書土器の出土は、長距離の交易を含め物資の集積・分散の拠点地域で、それを掌握・調整する有力者の存在が窺えます。そこでの交換財の一つとしては、片部・貝蔵遺跡などの大規模灌漑施設を考慮すると「コメ」が想定できます。

3 西山 1 号墳

貝蔵遺跡・片部遺跡を望む標高 28m の低位段丘上に西山古墳群があります。最古の西山 1 号墳は、全長 43.6 m・前方部 26.1m の前方後方型の墳丘墓です。未調査ですが、前方部があまり伸びない形態で葺石・埴輪などは検出されていません。従前は、弥生終末期を古墳前期と編年し前期古墳と評価されていましたが、土器編年の見直しに伴ない弥生墳丘墓とする有力な意見もあります。地域には、最古の西野 4 号墳をはじめ西山 1 号墳と同時期の上野 1 号墳、東峡遺跡 女牛谷墳墓群、庵ノ門 1 号墳、西野 4 号墳などがあります。いずれも、大規模集落が眺望できる墳丘墓です。第 3 1 回の弥生ウォークでは、改めて確認したいと考えています。

(編集委員)

東 治雄 井上知章 植田洋高 谷口敬子 福島道昭 藤原隆雄 万徳順一 宮川真由美